

中山間地域における農業実践を通じた地域振興のモデル提案

1170453 長谷 達弥

高知工科大学マネジメント学部

1. 概要

筆者の在住する高知県は、国内でも可住地面積が小さい地方として知られている。可住地面積とは、県土の面積から林野面積（森林や草生地の面積）と主要湖沼面積（1㎡以上の自然湖）を現じた面積である。高知県といえば太平洋に面しており、カツオの一本釣りのイメージからか、海のイメージが強い。しかし、実際は、県土に占める森林率が約84%ということと河川が中心部を多く流れていることもあり、可住地面積は全国でも最低レベルの地域（16%程度と呼ばれる）である。そのため、平野の外縁部から山間地、いわゆる中山間地域に居住する人口も少なくない。中山間地域においては、大学生などの若者を呼び込むために、アイデアを凝らしている。全国でも、山地の多い地方は多く、農水省データによれば「中山間地域が国土面積の73%を占め、耕地面積の40%、総農家数の44%、農業産出額の35%、農業集落数の52%を占めるなど、我が国の農業の中で重要な位置を占めている」という。こうした中山間地域の取り組みは、全国の地方における課題ではないだろうか。本稿では、中山間地域における内発的発展を志向した大学生の農業への取り組みを報告し、BSCを活用し、土佐町石原地区の活性化を取り巻く因果関係を整理・分析する。

2. 背景

筆者は大学2年次より、農業を通じて地域活性化に取り組む団体を運営してきた。元々、農業に強い関心があったため、農業に対する強い思いとビジネスとしての魅力を感じ、農業を利用した地域活性化に興味を持った。また、高知大学名誉教授の大野晃が著した『限界集落と地域再生』は、高知の山間部の過疎化を記述したものであるが、集落を①存続集落、②準限界集落、③限界集落、④消滅集落の4つに分類してい

る。大野はこの現状を踏まえ「65歳以上の高齢者が集落人口の50%を超え、冠婚葬祭をはじめ、田役、道役等の社会的共同生活の維持が困難な状態にある集落」と定義した。2006年度の国土交通省の調査によれば、国内に置ける全集落数は62,273（775市町村）であり、そのうち限界集落と呼ばれる集落は、約13%の7,878集落であるという。1999年～2006年にかけて消滅した集落は191あり、10年以内に消滅する可能性のある集落は423、いずれ消滅する可能性のある集落は2,220、消滅する恐れのある集落の合計数は2,643あるという。そこで、この現状を踏まえ、別の活動で訪れていた土佐町石原地区を拠点に、耕作放棄地を利用した農業実践による地域活性化に取り組もうと考えた。

3. 目的

本研究は中山間地域で耕作放棄地を利用した農業実践を通じて、中参加地域の現状を調査し、地域活性化のモデルを見出すことを目的とする。

4. 研究内容・方法

岡本義行は、内発的発展を支える産業は、「人的資源集合」が時代とともに変化しながらイノベーションや生産性の改善を生み出すよう転換させる必要があるという。空気、雰囲気、文化、価値観などの転換が伴う「人的資源集合」を形成することが地域活性化に繋がると述べている。

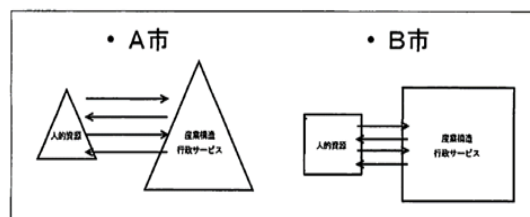


図1. 産業構造と人的資源の対応

(出所：岡本義行「地域の内発的發展に向けて」『地域イノベーション』 vol.4,p.51,2011)

本稿では、このフレームワークを意識しながら、中山間地域における自ら関与する農業組織運営と地域活性化について考察する。筆者はこれまでも文献 [1] [2] [3] のような地域の農業ビジネスにおいても、高知市から来るまで約 2 時間の位置にある中山間地域にある土佐町におけるフィールドワークを展開している。筆者は大学入学時から「農業団体あーく」を設立し、高知で農業に取り組んでいる。この団体の設立構想から設立までの経緯、その後の取り組み、今後の構想、土佐町との関係、地域との繋がり等について、インタビュー及び直接観察の手法を通じて、一次資料収集を行い、ここから得られた知見を元に、引き続き定点観測や継続的な参加観察を行うという手法を用いてケース研究を行う。

5. 研究・調査

(1) 活動初期

筆者の長谷達弥が在籍している高知工科大学のサークル「ココイコ!!プロジェクト」では、44 人のメンバーが中山間地域の活性化を目的に活動している。主な活動場所は高知県香美市の神池地区である。高知の地元で「地域」の個性や主体性を最大限に活かす為のプランニング・マネジメント・ブランディング等、プロジェクトの立ち上げから運営までをトータルでプロデュース・コーディネートする濱田企画事務所がある。「ココイコ!!プロジェクト」のメンバーが、濱田企画事務所の紹介に

より、土佐町で開催されるライトアップイベントの企画・補助を行うこととなった。この企画において、土佐町の石原の里協議会の関係者と出会い、高知県や土佐町の推進する地域主体の活動助成に応募して補助金を得た。

我々は、土佐町をこの時はじめて訪れ、人口の少なさと耕作放棄地、遊休地が点在していることに驚いた。このイベントには企画から参加したため、地元の方と対話する機会も多く、当時いしはらの里協議会のメンバーであった森本さんに出会った。

「遊ばせている土地があるから使ってみないか」というお話をいただき、農業体験をすることになった。我々は、こうした中山間地域の現状を知り、中山間地域を農業（土地の有効利用）によって活性化することは出来ないだろうかと考え、農業部門の設置を提案した。

当時、香美市神池地区を中心に活動していたココイコ!!プロジェクトは活動の助成金を香美市から受けていたため、土佐町での活動には充当できなかった。そのため同団体から独立し「農業団体あーく」として独自にメンバーを募り、農業活動を始めた。現在も土佐町から耕作放棄地を無償で借り受けて農業活動に取り組んでいる。耕運機で土地を耕すところからスタートし草刈もこなす。畝は鋤を使って両サイドから中心へ向かい土を盛り上げ、イモ類（サトイモ）や銀不老（地元の豆）を植えるため 30cm ほどの高さとした。

ここで採れた芋やマメを地元の市で売る。集落では収穫した芋で芋煮会も開催した。地元の農業高校と共同して、加工品の開発も検討している。

(2) 活動創出期～展開期

2014 年 3 月より土佐郡土佐町石原地区にて、ライトアップイベントで繋がりを持った森本さんの私有地をお借りして農業実践を始めた。

活動初年度となった昨年は、里芋、かぼちゃ、いんげん（銀不老）の栽培に挑戦した。栽培に関して全くの素人である私たちには、3 品目を栽培することが精一杯であった。

この経験により栽培のノウハウが身についた。栽培、収穫の基本的な知識から畝の上げ方、農機具の使い方など普段の生活では得られないものを習得することができた。

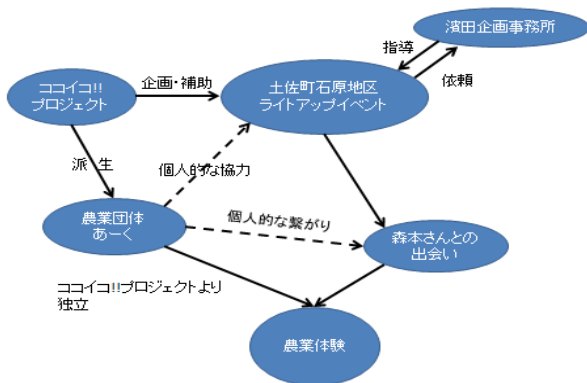


図 2. 中山間地域における大学生の農業組織運営(筆者作成)

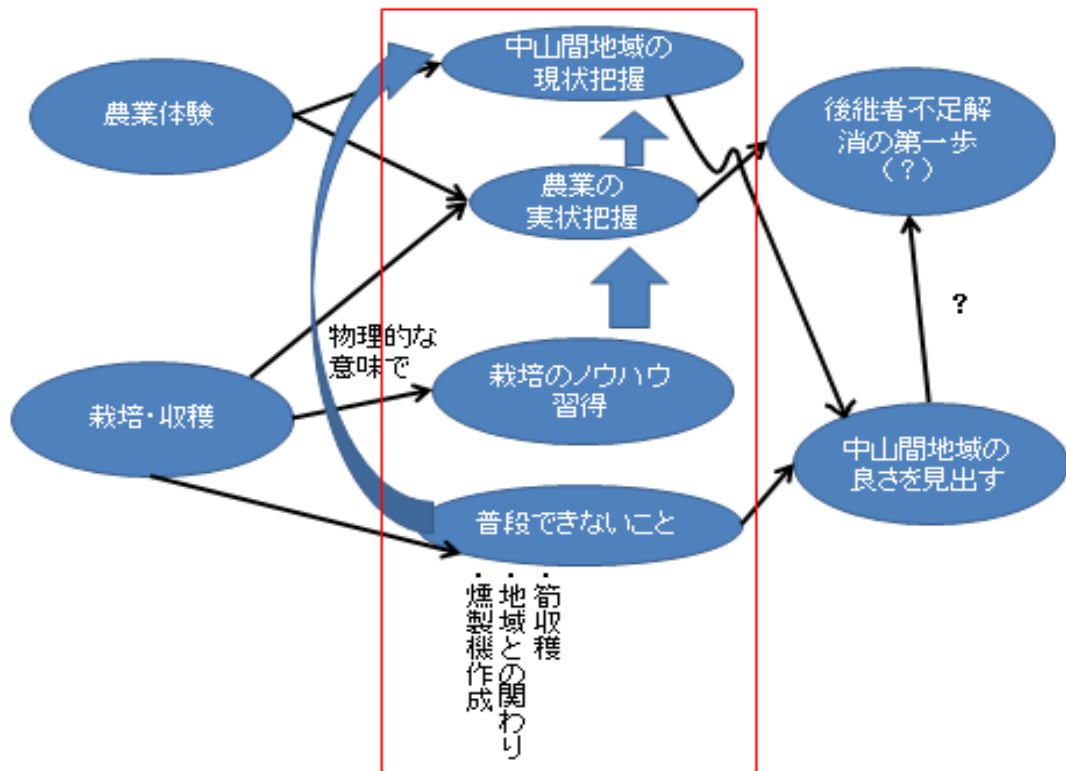


図3. 内発的發展と人的資源集合を意識した農業組織運営（筆者作成）

また、農業を自分たちで実践することで、農業の実情にも迫ることが出来た。作業自体重労働であり、何時間も連続で作業はできない。しかし、作物の成長は待ってくれないため期限を決めたらその日までに作業を完了させなければならない。作業の効率化を図ろうとすれば多額の投資が必要となる。後継者不足や新規参入する若者が増えないのはこの辺りが課題となっていると考えられる。

しかし、中山間地域での活動は大変なことばかりではなかった。森本さん宅の裏山で筍を掘りって調理していただいたり、石原地区の方々と集会所で交流会を開いたり、作業中に声を掛けていただくこともあった。こういった自然や人とのふれあいは、今日の市街地での生活ではあまり感じることはできない。私たちが作業を行っている土佐郡土佐町石原地区は、高知市内から車で2時間ほどの場所にある。峠を一つ越えた山奥にあり、道路は綺麗に整備されているが道は山と川に挟まれている。車通りも少なく、地域にスーパーと直販所が1件ずつあるだけである。

生活しやすいとはいえ、大きな土地もないため農業で生計を立てていくのは困難と思われる。

生活は多少不便であるが、魅力もある。私がまず感じたことは水が綺麗であるということだ。透明度が高く川底までくっきりと確認することが出来る。高い建物が無く、街灯も殆ど無いため夜には満天の星空を望むことが出来る。

これらに気づけたことも、中山間地域で農業を実践してみたからこそである。耕作放棄地及び遊休地の増加を解消するには、こういった中山間部の魅力を発信し、移住者を増やしていく必要がある。

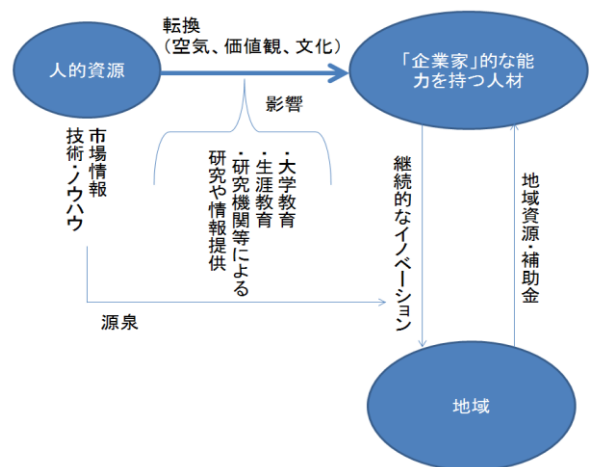
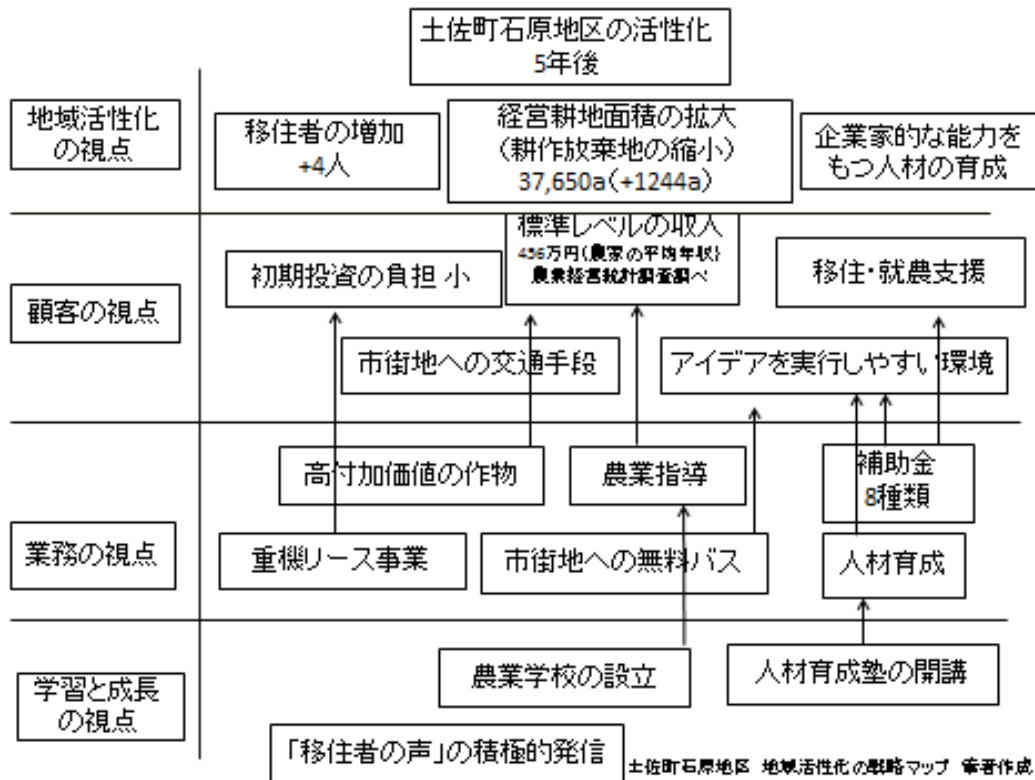


図4. 内発的發展と人的資源集合を意識した農業組織運営（筆者作成）



6. 分析

2年間に及ぶフィールドワークといインタビューから、土佐町の地域活性化における現状や課題を洗い出し、問題を顕在化させるためにBSC(バランス・スコアカード)のフレームに沿って分析を行う。

①地域活性化の視点では、移住者と経営耕地面積の拡大、企業家的な能力を持つ人材の育成の3項目を掲げ、活性化につなげる。

②顧客の視点では、移住・就農に関する支援により、見知らぬ土地での不安を少しでも解消しようという努力が見られた。また、町の規模や環境から、ビジネスを展開しやすく、そのための補助が充実していることもわかった。しかし、重機や農具の準備金としてはまだまだ足りていないのが現状である。そこで、新たに重機等の貸出を行い、新規就農者の負担を減らす。

③業務の視点では、

I. 標準レベルの収入を得ることが出来るようにするために農業の指導はもちろん、高付加価値の作物を栽培する。

II. 人材育成により、町民が企業家的な能力を持つ人材へと変化させる。これにより、外部の力に頼らない継続的なイノベーションが可能になる。

III. 重機リース事業を立ち上げ、安価で重機を使用することの出来る仕組みと新たな顧客を生み出す。

④学習と成長の視点では、農業に必要な知識(主に暗黙知)を形式知へと変換し、マニュアルとして移住者、新規就農者に伝承する。また、人材育成塾では実際に中山間地域でビジネスを成功させている経営者や地方でのビジネスに興味があるベンチャー経営者等を招き、定期的に勉強会を行う。

7. 考察・今後の展開

本調査研究で財務の視点、顧客の視点、業務の視点、学習と成長の視点の4つの視点をういた経営分析の手法が、地域活性化にもある程度有効であることが考えられる。今後は今回の分析を元に問題点を洗い出し、より魅力があり、実行可能な計画を立てていく必要がある。

中山間地域の過疎高齢化は進んでいる。土佐町は準限界集落地域であるが、さらに地方部では、深刻な過疎化となって

いる。耕作放棄地の活用もままならない箇所もある。この状況から脱するためには、地域内部に存在する企業家的な人材がイノベーションを継続的に起こす必要がある。そのためには、町が移住と農業の二本柱に人材育成を加え、地域の将来と向き合い、5年後、10年後のビジョンを見据えてまちづくりを行っていくことが、革新的な地域づくりの第一歩であると考えられる。

8. 引用・参考文献

[1]多田有里、桂信太郎、井形元彦「地域活性化のためのBSCを活用した戦略立案・企業環境分析に関する調査分析」『地域活性研究』vol.5,pp.230-237,2014年。

[2]井形元彦、桂信太郎「農業ビジネス活性化に向けた概念データモデリング、戦略マップ、品質機能展開の分析視点援用」『地域活性研究』vol.5,pp.52-62,2014年。

[3]桂信太郎、那須清吾、永野正朗「地域ビジネス事業比較による産業クラスターの安定性に関する研究」『地域活性研究』、地域活性学会誌,vol.4,pp.1-10,2013年。

[4]岡本義行「地域の内発的発展に向けて」『地域イノベーション』vol.4,pp.47-52,2011年。

[5] 濱田企画事務所,

<http://hamada-p.com/concept.html>

[6] 高知で暮らす。ポータルサイト

<http://www.pref.kochi.lg.jp/~chiiki/iju/shoukai/munic/tosacho.shtml>

[7] 農林水産省市町村別データ 長期累年 耕地面積【高知県】

http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sityo_tyouki/kouti/k39.html

[8] 谷川恵子「農業生産法人におけるBSC・戦略マップを活用した経営戦略立案支援」2015年